

人々は大学を卒業した後にも大学時代のことを時々思い出す。同窓生と会い、大学時代の思い出を語りあうこともある。新聞記事で卒業した大学名や教授の記事があると思わず読んでしまう。卒業した大学に行き、同窓会に参加し、ゼミの教員やサークルの後輩と話すこともある。

大学時代の経験は、個人に内面化され、身体の一部になっている。卒業生たちは、自らの身体に刻まれた過去の記憶を、常に現在の時点から繰り返し想起する。

人が在学時代の記憶を一人で回顧するにしても「自らが属していた集団的枠組みから想起し思考」*する。身体は現在にいながら、過去を喚起、再生し、さらに未来のなかで再構築しつづける。

大学同窓会は、卒業生が、「現在のなかで過去の学生としての自分を呼び戻し、過去の自分に出会う」*機会である。同窓会での儀式も彼らを大学的過去へと導かせる。同窓会総会では校歌・応援歌斉唱、学長挨拶などの儀式が行われる。その場にいる人がすべて同じ大学的空間にいると意識させられる。共同体意識、一体感が形成され、再認識される。学長挨拶では、大学の過去が語られ現在が説明され将来展望が述べられる。現在の学生たちが「伝統を受け継ぎながら、がんばっているという趣旨」*になる。同窓生たちは、自分たちが作り上げた伝統や文化が大学のなかに残り、生き続けていることを確認する。(母校は今年ついに創立一〇〇年の記念すべき年を迎えました。この時にあたり、わたしどもはあらためて、それを守り育ててきた卒業生たちの熱い志を思わずにはいられません)(N女子大学長、同窓会会報)

このように、大学教育は、単に大学に在学する期間に限られるものではない。そこで共有し体得された大学文化は、卒業生の身体に刻み込まれ、現在と未来に影響を及ぼし続ける。(※は黄順姫「記憶の中の学校」『学校システム論』子ども・学校・社会』放送大学教育振興会、二〇〇二年からの引用。)

(武内清)